

第1回「青年平和講座」を主催

AMDA菅波茂代表が講演



世界を視野に「対話、を考える場となった
青年平和講座（7日、岡山文化会館で）

戦後60年を迎え、戦争を知らない青年の心に「平和の種」を植えようと、岡山で第1回の「青年平和講座」が7日、岡山文化会館で行われた。

糸島青年部長のあいさつに続き、学生部の有志が、今年、中国学生部として行った「学



菅波茂代表

生平和意識調査」（8332人が回答）の結果分析を。「核廃絶は必要」と考える人が68%いる半面、「核抑止が安全保障に貢献している」との意見が69%に及ぶ矛盾を指摘し、厳しい現実を前に核を黙認している姿を強調。今後さらに、平和への意識向上を目指し、行動していく決意を述べた。国際医療援助団体「AMDA」の菅波茂代表が講演を行った。（別掲）

講演の要旨

創価学会では「平和」に向けての「対話」を強調されており、素晴らしいことだと思います。

さて、1990年、イラクがクウェートに侵攻したとき、アメリカを中心とする多国軍に日本は140億（約1兆4000億円）の財政支援をしたにもかかわらず、「顔が見えない日本」と揶揄されました。

つまり「対話」と「平和」と「顔が見えない日本」をいかにして結ぶかを考えなければなりません。

AMDAが考える平和の定義は「きょうの家族の生活とあすの希望が実現できる状況」です。具体的には「食事」「健康」「子どもの教育」という人間として最低限必要なものを確保された状態です。これを壊すのが戦争・災害・貧困なのです。創価学会青年部が国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を通しての募金活動をされていることは、よく存じています。そのUNHCRの会議で私は、アジア・日本が難しい。

が人道支援をする理由を教えてほしいと問われたことがあります。

欧米のNGO（非政府組織）はキリスト教系が多々、唯一神の「啓典の枠を超えて、共存共栄できるのです」と。

学会青年部の皆さんに期待したいのは、被災地など最前線で絶望状況にある人への対話です。体を張った対話は相手の魂に残ります。若いうちにぜひ参加してほしい。困難を共にするなかで、尊敬と信頼関係が生まれるのです。

皆さんは法華経を大切にされています。私も法華経が仏教のなかで非常に重要であることを知っています。そして今、創価学会は日本の仏教団体の中でナンバーワン規模です。ゆえに期待も大きいです。

創価学会のメンバーは、しっかりして「何のため」との意欲がある。そこを私は信頼している。AMDAにも創価大学の出身者がおり、非常に優秀でまじめで人柄もよい能力も高い。そういう皆さんだからこそ仏法を世界に広め、頑張ってください。

学会青年部による 国際的人道支援を高く評価

さらに最前線での「対話」に期待